

令和4年度「まちなかアートプロジェクト」

事業検証調査 報告書

令和5年3月

NPO法人アートNPOリンク

# 目次

<b>I. 検証・考察</b> .....	<b>1</b>
<b>II. 事業実績</b> .....	<b>6</b>
1. 事業概要.....	7
2. 事業実績.....	8
<b>III. モニタリング調査</b> .....	<b>10</b>
1. にしのこまんぷく食堂.....	11
2. 英彰こども食堂ここなら.....	19
3. いづはまスマイル食堂.....	24
<b>IV. アンケート調査</b> .....	<b>31</b>
1. アンケート調査の概要.....	32
2. 調査結果.....	34
3. 調査票.....	37
<b>V. ヒアリング調査</b> .....	<b>40</b>
1. アーティストへのヒアリング.....	41
2. 食堂実践者へのヒアリング.....	43

## I. 検証・考察

---

## ◎ 事業実績の分析

令和4年度の「まちなかアートプロジェクト」は、音楽、演劇、ダンスのアーティストが年間を通じて堺市内の3か所の子ども食堂と継続的に関わり、ワークショップを共に実施した。延べ実施回数は14回、参加延べ人数は260人となっている。参加型、対話型のワークショップを通じて、子どもたちが文化芸術を能動的に体験し、それを通して他者と関わるコミュニケーションのきっかけとなった。また、ワークショップの進行は、若い世代で新進気鋭のアーティストを核として、コーディネーターや進行アシスタント、財団スタッフ、食堂実践者とともにチームを形成して取り組んだ。

## ◎ モニタリング調査

ワークショップの企画・制作・運営の経験が豊富な関西在住のコーディネーター3名に協力を依頼し、3カ所の子ども食堂でのワークショップに1名ずつオブザーバーを派遣し、ワークショップの現場の状況をモニタリングした。モニタリングは各施設2回で、1回は概況の視察のみ、1回は詳細のレポートを作成した。オブザーバーの主な所感は下記の通り。

- 子ども食堂が子どもたちにとって大事な場所、安心できる場所であることを感じた。子ども食堂のスタッフにとっても、外部からの目が入ることで場の力を再確認できたことはよかった。スタッフの方々の日頃の観察力、対応力が、ワークショップにおいて安心感も伴う場になっていた。
- 身体表現がテーマのワークショップでは、コントロールして全体をまとめることに注力する形ではない進行になっており、「健全な個人主義」という印象をもった。「中心と周縁」ができることで安心して身を置ける子どももいるように思えた。
- ワorkshopでは「積極的に子どもたちに委ねる」という手法をとった結果、子どもたちが秩序を作っていくのを垣間見ることができた。子どもたちが自律的に動く状況が生まれたことで、進行役のアーティストたちは、子どもたちに“このタスクをこなしてね”というコミュニケーションではなく、音楽を通じたコミュニケーションに費やすための余白が生まれたようだった。

## ◎ アンケート調査

3施設のワークショップのすべて回で、参加した子どもたちにアンケート調査を行った。回収数は191件で、実施会場別の回答の割合（参加したワークショップのジャンルの割合も同じ）は、いづはまスマイル食堂（音楽）が52%、にしこのまんぷく食堂（ダンス）が25%、英彰こども食堂ここなら（演劇）が23%。主要なアンケート調査の結果は下記の通り。

- 食堂で出会う友だちや大人と、回答者（子どもたち）の関わり方について「気軽に楽しく話せる人がいる」が93%、「強いつながりを感じている人がいる」が76%、「悩みや本音を話せる人がいる」が73%となっている。
- ワorkshopの感想や印象の項目を提示して「とてもそう思う」から「まったく思わない」まで4段階評価で尋ねた。「とてもそう思う」という積極的な同意の割合が高い順に「音楽、演劇、ダンスのいずれかが身近になり、楽しくなった」（77%）、「元気になったりやさしい気持ちになった」（75%）、「友だちや食堂の人と仲がよくなった」（71%）となっている。

- ・ワークショップ全体にどのくらい満足したかを尋ねたところ、満足層が95%（「とても満足した」が79%、「まあ満足した」が16%）、「またワークショップをやりたいですか」と尋ねたところ、再実施の要望が97%（「ぜひやりたい」が85%、「まあやりたい」が12%）となっている。

## ◎ ヒアリング調査

ワークショップを行ったアーティスト3名と、子ども食堂実践者3名、それぞれを対象にグループインタビューを行った。インタビューでは、「1年間の活動の概要」「ワークショップで印象に残ったエピソード」「子どもや大人の関係性の変化、ご自身の変化」「今年度の成果と今後チャレンジしたいこと」「子ども食堂でのワークショップの意義」の5項目を共通の質問項目とした。ヒアリングで聞かれた主要な意見は下記の通り。

- ・アーティストは、初回のワークショップを行うまでの食堂実践者は、何をやるのか懐疑的な様子だったが、経験してみると信頼関係を獲得できたことや、子どもたちともフラットな関係で、子どもたちの自主性や自発性を尊重する姿勢が共通していた。
- ・アーティスト自身にとっても今回のワークショップは貴重な経験であり、ワークショップに対する考え方や進行の技術について改めて気付きを得る機会となっていた。
- ・子ども食堂の実践者は、ワークショップを通じて、それまで子どもたちが見せたことのない表情や振る舞いを発見できたことに驚きや意外性を感じ、それを引き出すアーティストの人間的な魅力やコミュニケーションのスキルを高く評価していた。
- ・例えば、ワークショップがきっかけで、しばらく来ていなかった引きこもりがちな子が、大勢の友だちを誘って来てくれたことや、ワークショップのあとで、子どもから子ども食堂の実践者に、家庭の困難な状況を打ち明けた子がいたことなど、ワークショップを通じた子どもの内面の変化や大人との関係の変化で重要なエピソードが紹介された。
- ・子ども食堂でのワークショップの意義について、アーティストからは「多様な生き方がある」ということを子どもたちが知る大事な機会ではないかという意見が聞かれた。また食堂実践者は、様々な貧困（心の貧困、経験の貧困、関係性の貧困など）に対する文化芸術の有効性を強調した。

## ◎ 全体を通じた考察

「まちなかアートプロジェクト」の令和4年度の事業の結果（アウトプット）として、実施会場が3カ所、延べ実施回数が14回、延べ参加人数が260人といった実績の数値を示すことができる。ワークショップという活動形態上、参加人数は一定の範囲で行うこと、子ども食堂実践者の通常の運営に負荷をかけ過ぎないことなどの要因を考えると、妥当な規模の参加人数、実施回数だと考える。

事業の結果の数値としては大きくはないものの、成果（アウトカム）としては非常に充実していた。アンケート調査では、参加した子どもたちがワークショップへの満足度や継続を要望する意見が圧倒的な割合を占めている。この満足度や継続の要望の高さの背景には、ワークショップの実施以前から、子ども食堂が子どもたちにとって安心できる場所であったことは大きい。加えて、今回のアーティストたちが若い世代であったこ

とから、子どもたちの「お姉さん、お兄さん」のような存在で継続して関わり続けたことや、子どもたちとフラットな関係性で、親、先生、子ども食堂実践者とは違う立場の大人だったことも、作用している。

こうした成果を受けて、事業の波及効果（インパクト）は、アーティストや子ども食堂実践者にも広がった。従来からワークショップに取り組んできたアーティストにとっては、自らのワークショップの「型」を見直す機会となり、子どもを対象としたワークショップの企画内容や進行の手法をより良くしたいという意欲が高まった。また、子ども食堂実践者は、心の貧困、経験の貧困、関係性の貧困といった子どもたちを取り巻く課題に、文化芸術体験の効果を目の当たりにしたことで、こうした活動を今後も継続し、広げていく強い意志を顕わしていた。

「まちなかアートプロジェクト」は、堺市の文化芸術振興のみならず、子どもたちを取り巻く様々な地域の課題に文化芸術を活用する可能性の扉を開いた。令和4年度を起点として、今後の継続と発展に期待したい。



## II. 事業実績

---

# 1. 事業概要

## (1) 事業全体の目的・方向性

- アーティストが年間を通して、子ども食堂と関わり共に企画を制作、実施していくこと。
- 企画は参加型、対話型を意識し、見ること、聴くことを通して、何かをするという能動的な文化体験をすること、また、体験を通して子どもが他者と関わるコミュニケーションのきっかけとなること。
- 「見る」「聴く」行為をどう受け取ってほしいかを改めてアーティストと、食堂とで考える。
- 継続することで、「今日はあのイベントやっているから行ってみよう」といった、子どもの居場所として子ども食堂の機能強化につながる。

## (2) 実施会場と活動方針

### ◎ いづはまスマイル食堂（西区浜寺船尾町西）

- 古橋果林さん（音楽ワークショップ・リーダー）と堺市新進アーティストバンクの登録アーティストの協同による創作音楽のワークショップ。
- イベントでは毎回20名程度の参加を想定し、入れ替わりはあるが、同じ層の子どもに声をかけて実施・継続することができる。
- 食堂実践者にとって、「経験してほしい」と思う子が多数いる。ワークショップを通じて子どもがどのように変化したかを大事な視点とする。
- 若手のアーティストが企画に関わることを通して、「対象を意識したワークショップ」を制作できるようになることも目論んでいる。

### ◎ 英彰こども食堂ここなら（堺区少林寺町西）

- 神永真美さん（追手門学院高等学校 表現・コミュニケーションコース 教員）による演劇的手法を使ったワークショップ。
- 毎回20名程度の参加を想定し、各回で参加対象者の学年を絞るため、今回は1年生対象、次回は2年生対象と、毎回異なる子供が参加する。
- 食堂実践者の子ども達へのアンテナがどう広がるか、子どもたちへの気づきがどう増えていくかを大事な視点とする。

### ◎ にしのこまんぶく食堂（堺区協和町）

- 神戸市長田区を拠点とするNPO法人ダンスボックスによるコーディネートで、パフォーマンス集団contact Gonzoのメンバーを軸としたダンスのワークショップ。
- ワークショップは事前申込制をとれないため、参加者層や参加人数が不明であり、「いつ来ても、いつ帰ってもいいような場」となることが求められる。
- 食堂実践者にとっての今後の食堂のあり方や、食堂と子どもの関係を深めることが大事な視点となる。

## 2. 事業実績

	いづはまスマイル食堂	英彰こども食堂ここなら	にしのかまんぶく食堂
アーティスト	古橋果林さん(音楽ワークショップ・リーダー)	神永真美さん(追手門学院高等学校 表現・コミュニケーションコース 教員)	三ヶ尻敬悟さん (contact Go nzo)、内田結花さん(振付家、ダンサー)
アシスタント またはコーディネーター	西前菜々子さん、藤原朱里さん、森千夏さん(いずれも堺市新進アーティストバンク登録音楽家)	アッキー、ケンちゃん(いずれもワークショップネーム)	中西ちさとさん、松見拓也さん、寺田英史さん、NPO法人ダンスボックス
実施日(参加者数)	2022年 7月9日 (28人) 9月10日 (24人) 10月9日 (22人) 12月10日 (20人) 2023年 2月4日 (25人)	2022年 6月4日 (16人) 7月17日 (19人) 10月23日 (19人) 2023年 1月15日 (15人)	2022年 10月19日 (17人) 11月16日 (14人) 12月21日 (16人) 2023年 1月18日 (10人) 2月15日 (15人)
実施回数	5回	4回	5回
参加延べ人数	119人	69人	72人

### まちなかアートプロジェクトの合計

実施会場..... 3か所

延べ実施回数..... 14回

参加延べ人数..... 260人



### III. モニタリング調査

---

# 1. にしのこまんぶく食堂

## (1)基本情報

日付	2023年2月15日（水）	会場	にしのこまんぶく食堂
時間	16:00-17:30 ワークショップ 17:30-18:30 お弁当の配布 18:30-19:00 振り返り	概要	のれんづくりと今までのワークショップの様子を撮影した記録映像の上映
参加者	子ども	10人	学年不明 女性9人、男性1人
	食堂スタッフ	5人	谷岡さん、加藤さん、ほか
	財団スタッフ	2人	今野さん、石澤さん
	その他	13人	進行役含むダンスボックススタッフ7名、食堂スタッフ2名、小学校教員3名、社協職員1名
進行役	三ヶ尻敬悟さん、内田結花さん		
記録者	川那辺香乃		

## (2)会場、参加者、進行役等に関する補足情報

### ◎ にしのこまんぶく食堂について

部落解放同盟大阪連合会堺市部と一般財団法人堺市人権協会の事務所内にある。建物は、各団体の事務所以外にも会議室、キッチンスペースがある。毎月第三水曜日が食堂の日で、大仙西校区の子どもたちが主に利用する。コロナ禍以降はお弁当の配布に切り替えている。

いつもはこの建物内でお弁当を作るそうだが、この日は堺市内の飲食店の方が提供のお弁当の配布だった。子どもや大人のスタッフ以外にも、高校生や大学生が配布準備のために建物内で待機していた。

本事業について、食堂側のスタッフは「子どもたちが地域とのつながりを考える機会になれば」と地域伝統の盆踊り「どんでんかっか」とダンスのコラボレーションを希望していた。過去4回は近隣の大仙西小学校で開催。ワークショップ終了後に食堂でお弁当をもらって帰るという流れになっていた。この日のワークショップはおもに会議室と外のスペースで行われた。

### ◎ 参加者について

食堂スタッフの方が毎回事前にチラシを作成し、保護者の方への周知にも務めている。全ての回に参加している子どもは少ないが、ほぼ2回目以上という子どもたちが多かった。初参加は2人。11月に伺った際はアーティストとのコミュニケーションが少ないように感じたが、今回はアーティストや子ども食堂、社協、学

校関係者などの大人とも楽しく話していて緊張が緩んでいる様子だった。ワークショップは事前申込制ではないので当日に何人くるのか、誰がくるのかがわからない。

### ◎アーティストについて

ナビゲーターは、全5回に参加している三ヶ尻敬悟さん、内田結花さん、展示設営の担当として初参加する寺田英史さん。アシスタントは、中西ちさとさん（ダンサー）、松見拓也さん（撮影）、コーディネーターはダンスボックスの文さん、田中幸恵さんが行う。

三ヶ尻さん・内田さんともに、普段はコンテンポラリーダンスのアーティストとして活動されている。アシスタントの中西さん、文さん、田中さんはワークショップのナビゲーター経験も豊富であることから、アシスタントがナビゲーターをバックアップする体制で組んでいることが伺える。この日、アーティストのチームは14:00ごろから会場に入り準備を進めていた。

### ◎備考

毎回、堺市社会福祉協議会の方、学校の先生が見学に来られている。

## (3)事前打ち合わせの記録

メール等で、これまでのワークショップの集大成となり、映像作品（過去4回のワークショップ映像をまとめたもの）のお披露目も兼ねている回と聞いていた。会場に到着後、進行表をいただいた。

## (4)ワークショップの記録

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした（所感があれば斜字体で記入）
15:55	谷岡さん（食堂S）	子どもたち	食堂の外にいる子どもたちに声をかけて、食堂の一室に入るように促す。
	子どもA	中西さん	中西さんにお芋の形のブローチをつけているか尋ねる。
	ナビゲーター、アシスタント	子どもたち	内田さん、中西さん、文さん、田中さんは子どもたちと一緒に部屋に入る。他のナビゲーター、アシスタントは外で設営の続きを行う。
	子ども2人（B・C）		部屋に全員入ったものの、B、Cは外に出る。遊び足りない様子。この時点では子どもは6人。
16:00	内田さん	子どもたち	今日の流れの説明。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 今日はこのワークショップの最後であること</li> <li>• 最後にダンスクラブの映像を流すこと</li> <li>• にしのこまんぷく食堂ののれんづくりをすること</li> </ul> 「のれん」をあまり知らない子どもが多い様子。 まずは「にしのこまんぷくしょくどう」をA4よりひとまわりほど大きい厚手の紙に1文字1枚ずつ大きく、太字で文字を書くように伝える。その後、のれんに色をつけたりする作業もある。
	文さん	子どもB	Bが部屋に戻ってきたので、サンプルを見せて、「太くでっかく書いてね」と改めて説明。その後、文さんはほかの子どもたちの様子も見ながら「OK, OK!」「ナイス!」と声かけをする。Bはなにか一言文さんに言って、また部屋から出る。

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした（所感があれば斜字体で記入）
	子どもたち	田中さん、中西さん	田中さんのまわりに、作業の早い子どもたちが集まって字を描いている。中西さんも一緒にフォローに入っている。
16:05	子どもB	内田さん	部屋に戻ってきて、元いた場所に座る。内田さんがBに近寄っていき、再度説明。Bは最初「ん」を書く。うまく書けなかったのか、書いた紙を投げる。
	加藤さん（食堂S）	子どもB	Bが「ん」の紙を投げた瞬間かけよって「どうしたん」「うまくかけてるやん」と声をかける。
	内田さん	子どもB	「ほかの文字にしようか？」と提案。再度新しい紙を渡す。
	子どもB	今野さん	Bが「ど」を描く。描き終わるまで今野さんが付き添う。
	子どもC	中西さん、文さん、加藤さん	部屋に戻ってきて中西さんの近くに行く。中西さん、文さんで再度説明し、加藤さんも入ってフォローに入る。この時点で子どもは8人。（Cは初参加で、食堂スタッフも名前がわからない）
	加藤さん	子どもB	加藤さん、Bに「めっちゃうまいやん」と声をかける。その後、他の子どもの様子なども歩きまわりながら確認し、適宜声をかけたり、様子を観察している。
16:10	田中さん		「にしのこまんぶくしょくどう」の順に、机に紙を並べ始める。
	子どもC	内田さん、文さん、田中さん、ほかの子どもたち	Bが描いていた「ん」を子どもの1人が太く書き直し、Cが塗りたいと言う。ほかにも2人塗りたい子どもがいたが、じゃんけんでBが勝ち、塗っていく。
	文さん、田中さん、中西さん		だんだんできてきた文字を並べて、「かわいい」「写真に撮っておこう」「この文字の並びのバランスを忘れないようにしないと」と声を掛け合う。
	加藤さん	子どもC	そばで完成するのを見守っている
16:15	内田さん、文さん	子どもたち	「外に行くので、レインコートをきてください」と声をかける。
	子どもたち		レインコートを着る。ピンクやブルー、透明などいろんな色のレインコートがある。スタッフが手伝ったりしている。
16:20	中西さん	子どもたち	「着替えられた人から外にでよか～」と声をかける。準備できた子どもたちが外に出ていく。
	内田さん	子どもC	防寒用のアルミシートをポンチョのようにしてCに着せる。（Cは最初気に入ってそのポンチョで外に出たが、途中でレインコートに着替えている。）
	中西さん、文さん、田中さん、石澤さん		内田さん以外は部屋に残り、文字を切り抜く作業を行う。
16:25	三ヶ尻さん、寺田さん	子どもたち	三ヶ尻さんは駐車場側、寺田さんは建物側に立ち、その側に子どもが立つ台が用意されている。三ヶ尻さんがどちら側かにそれぞれ並び、1人ずつ絵の具がついたボールを下に投げてのれんの布に色をつけるよう伝える。外には、食堂スタッフ以外の大人も複数見ている。
	今野さん、川那辺	子ども	レインコートの上から上着を着ている子どもがいたので、上着を脱がして預かる。
	谷岡さん	子ども	「ちゃんとのれんを狙って投げるんやで」「服が汚れたらみんなが怒られるからな」と笑いながら声をかける。

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした（所感があれば斜字体で記入）
	三ヶ尻さんなど	子ども	初めに投げた子どものボールが早くて、布の外に出てしまいそうになる。
	三ヶ尻さん、谷岡さん、内田さん	子どもたち	再度、どこを狙うか伝える。谷岡さん、内田さんも「このあたりだよ」と手で示してわかるようにアナウンスする。
	谷岡さん	子どもたち	絵の具がついている手で人を触らないこと、袖をしっかりとめくるように全体に伝わる声で注意し、他の食堂スタッフも子どもたちの袖をめくる。
	子どもB	谷岡さん	ボールが外に行って、谷岡さんのズボンが汚れる。Bはとても不安そうな顔をしたが、すぐに谷岡さんがすぐ「大丈夫」と声をかける。
	子ども新規(2人)	谷岡さん	50m先に自転車で子どもがやってきたところを発見し、手を降って近づいていく。そのままこちらにくるよう誘導して、レインコートを着てもらい、途中から参加してもらう。この時点で子どもは10人。
	子どもたち	大人	ボールを投げている間、「めっちゃ汚れた!」「(布が) すごくきれい!」と近くにいる大人に声をかける。また、汚れた手をスタッフに見せて絵の具をつけようとする。
16:35	子どもたち		終わった子どもから手を洗いに行く。途中から参加した子どもはみんなが手を洗いに行ったあとも2・3回ボールを投げる。
	子どもたち	内田さん	汚れた手で内田さんのレインコートを汚す。
	子どもたち	内田さん	待っている間、子どもたちがレインコートが臭いといって脱ぎ出すが、内田さんが「もう一度同じようなことをするから着て」と声をかける。
	子どもたち	校長先生	休憩中に小学校の校長先生が見学に来る。自転車で来られたところ、子どもたちが「あ!校長先生!!」と叫んで手を振る。
	寺田さん、三ヶ尻さん		先ほどまで使っていた布を移動させ、別の新しい布をセッティングする。
16:45	内田さん	子どもたち	長い棒の先に釣竿のようにスポンジや造花などがついているものを見せ、これを使って着色するように伝える。
	谷岡さん、三ヶ尻さん、寺田さん	子どもたち	谷岡さんが棒を持っている人は絶対に棒を振り回さないように伝える。「制限時間は?」という質問が出たので、三ヶ尻さんが「10秒」と答える。谷岡さんが、他の子どもたちにも伝わるように、「描き始めてから10秒で交代やで」と声をかける。実際にやってみると、絵の具がつきにくくて、10秒間描くことができない。そのため寺田さんが絵の具を追加でつける時はカウントせずに進めていく。
	中西さん、文さん、田中さん、石澤さん		文字の切り抜きが終わり、外に出てフォローをする。
	三ヶ尻さん	子どもたち	枝にサンダルをつけた棒を差し出す。そのほかにもモップや細い糸の束などの棒が出てくる。
	子ども	加藤さん	造花がついている棒を見て「花はあかんやろう」と言うと、加藤さんが「(布にあたるときに) お花の形になるかもしれんやん」と返す。
	内田さん	子どもたち	棒の先についているものを触っていたら、棒が折れて絵の具が子どもたちの服についてしまう。
	子どもたち	校長先生、学校の	早く順番が来てほしいようにしている。校長先生やほかの大人たちと

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした（所感があれば斜字体で記入）
		先生、社協さん、 食堂スタッフ	話している。ほかの学校の先生がやってくると、並んでいた列から外れて駆け寄っていく子どももいた。
17:00	子どもたち		レインコートを脱いで手を洗い始める。
	ナビゲーター・アシスタント		布の前で文字をどう配置していくか相談している。
17:10	子どもたち	食堂スタッフ	「もう帰る」と言い出す子どもが出てくる。だんだん暗くなり、プロジェクターのスクリーンがはっきり見えるようになってきて、影絵を始める子どももいる。お弁当を取りに来た子どももやってくる。
17:15	全員		子どもたちが布の前に集まる。布の上には、最初に子どもたちが書いた文字を切り抜いた紙が並んでおり、寺田さんが黒スプレーを吹きかける。スプレーが「臭い」という子ども、「なんで黒なの？」という質問もあった。紙を外すと、歓声が上がリ「にしのこまんぷくしょくどう」の文字が完成する。
17:20	子どもたち、食堂スタッフ	アーティスト	ワークショップ終了。谷岡さんの声かけで全員で「ありがとうございました」と言って終わる。ここから子ども食堂のお弁当の配布時間に入り、谷岡さん、加藤さんもそちらにまわる。
	ナビゲーター・アシスタント		のれんが乾くまで、しばらく端に寄せておく。子どもCが端に寄せるときに一緒に手伝う。
17:30以降			映像が流れ始める。途中から参加していた子どもがずっと映像の前に座って見ていた。また、ワークショップには参加していないが、お弁当をもらいにきた子どもも、少し映像が気になる様子だった。ワークショップが終わってからは、子どもAが文さんや学校の先生に抱きついたりしていた。

## (5) 事後の振り返りの記録

### ◎ アーティスト

- 今日のプランが盛り沢山すぎたが、他の方が絶対助けてくれると思って進めていた。
- 任せきりなところもあったが、なんとかのれんも映像もできた。
- 子どもたちはつくったり、ボールを投げたり、その感触に興味があったのではないかな。
- 食堂スタッフの方にも見てもらえてよかった。
- できなかった部分もあるけど最後にこの場所でできてよかった。ここで実施することで、参加人数が増えたらいいなと思ったが増えなかったのが残念。
- ずっと体育館で実施していたが、今日なじみの深い場所でできて、子どもたちは心なしかリラックスしていた。
- 字を描くという、1人での作業からみんなで遊んでいくという流れで、子どもたちが解放されていくように感じた。
- 体育館でやるよりも子どもたちの心の開き具合がちがった。ここが安心できる場所なんだと感じた。
- 体育館のときより盛り上がっていて、「なにをするかわからんけどたのしい」という感覚を味わってもらえたのではないかな。何回か一緒にワークショップを重ねられたからだろう。
- この食堂で、もうちょっとなにかできそうな気がする。
- もう少し汚れるような形式にしたかった。

- 施設内でやることの難しさとどう折り合いをつけたらいいかが今後の課題。
- ずっと続けてきている子どもたちは取り掛かるのがすごく早かった。次にやるんだという期待があったのではないか。
- 集中して文字を描いている時間が、素敵だなと思った。
- 映像が出たとき、のれんができる瞬間の子供たちの表情も驚きがあった。わすれられない瞬間になるだろう。
- ここが、なにか楽しいことが起こっている場所になっていくといいのではないか。
- 今日で最後なので、もう会わないんだと思うとさみしい。のれんを見て「あの人たちとつくったんやな」と思い出してくれたら嬉しい。
- また、まだ子ども食堂に来ていない子どもにとっても、のれんがこの場に親近感をもつきっかけになったらいいと思う。

### ◎ 子ども食堂 スタッフ

- 感無量とはこのことだなあと思う。
- 体育館とこの場所でやる時の子どもたちの雰囲気がちがうとのことだったが、こちらはあまり感じていなかったので、この場所が子どもたちにとって大事なのだろうと改めて思い知らされた。
- 5回は短かったように感じている。
- 今日はこうしたワークショップを子ども食堂でやる意味を感じることができた。
- これまでの4回でアーティストの名前を覚えたり、個別で(芋のワッペンを貸し借りするような)やりとりもあってそれが嬉しかった。
- また、普段やったらだめなことをあえてやるのが、うちの子どもたちは好きなんだろうなとも感じた。

### ◎ 財団スタッフ

- 場の力を改めて感じた。また、やりたいけど順番を待つ、レインコートで動きが制限されるなど、大人がつくる場に子どもが入っている感じがした。
- 気持ちを発散するかのように ボールを投げたり、色を塗ったりできたようだった。
- あれだけの人数の大人が関わっているからこそできたことだと思う。
- 子どもたちが、いつの間にかアーティストを「みかじり」「ぶんぶん」と気軽によんでいて、いい意味でゆるんできたのかなと思った。
- 映像を見て食堂にお弁当を取りにきていた子も興味深そうに見ていた。
- 映像やのれんはここに残るので、子どもたちにどういう変化が現れるのかなと思っている。

## (6) 記録者（オブザーバー）による全体の所感

### ◎ 「子ども食堂」という場の力

振り返りでも出ていたように、今回初めて会場を変えたことで、この子ども食堂が子どもたちにとってとても大事な場所、安心できる場所であることを感じた。11月に体育館で実施したワークショップを見学した時よりも、子どもたちが安心し、自由にこの場で活動しているように感じた。子ども食堂の実践者にとっても、外部からの目が入ることで場の力を再確認できたことはよかったと思う。

## ◎ 「見られている」ことの高揚感

関わる大人の多さもこれまでのワークショップのちがいのひとつとしてあった。いつもは子ども食堂の担当スタッフ、社協の方、学校の先生のみだが、屋外のワークに移った際、ワークショップを「見ている」大人がさらに3～4人加わった。大人たちは仕事の休憩の合間に外に出て、子どもたちの楽しそうな様子を見ていただけのように感じたが、それはあきらかに「見守り」につながる行為であった。

子どもたちにとってはいつも以上に、馴染みのある大人たちに「見られている」ことが嬉しかったのではないだろうか。実際に、ワークショップ中は子ども自身がいろんな大人に積極的に声をかけている様子が伺えた。

## ◎ 「祭」や「寄合」のような空間づくり

今回のワークショップは、屋外を利用することにより、子どもだけでなく子ども食堂のスタッフや先述したほかの大人たちも「見る」ことで参加しているような気持ちにさせるプログラムになっていた。

まず、「のれんづくり」のための大掛かりな設営によって、「これからなにが起こるのだろう」という期待感を生み出した。またポールや棒の先に筆ではない、普段だと筆として使わないようなものを「筆」として使用することで、子ども食堂のスタッフも「どうやってそれで描くのだろう」と疑問をもち、子どもと一緒に考える時間があったのではないかと思う。

絵の具のついたポールを子どもたちが予測不能な場所に投げるというドキドキ感や、服が汚れてしまうと云った想定外のことも、非日常にあふれていた。

全体を総じて「祭」や「寄り合い」のような、記録者にとっては懐かしさを感じる雰囲気があった。

## ◎ 安全な場をつくるエキスパート

屋外では大きく盛り上がった「のれんづくり」であったが、アーティストも「プランが盛り沢山だった」と言っていた通り、アーティストチームの作業量や子どもたちへの注意喚起など、細かく気になる点が多かったことも否めない。ただ、そういった際に子ども食堂のスタッフの方々が臨機応変にフォローに入っておられたことがとても印象深い。

前半の文字を描く作業でBがうまく描けなくて投げ出しそうになった際、瞬時に加藤さんが近づいて話しかけていた。また、屋外で棒を使った着色を行う際にも、谷岡さんが全体に呼びかけ、「棒を振り回さないように」「何秒間の間に描く」と伝えていた。さらに、谷岡さんは50mも先にいる子どもに声をかけ、走って近づいて行ったことにとっても驚いた。その子どもは途中からでも楽しく参加できたのではないかと思う。

子ども食堂のスタッフの方々の日頃の観察力、対応力が、ワークショップにおいて安心感も伴う場になっていた。

## ◎ 月に1回の「楽しみ」を提供する

このワークショップでは、本番が来るまで何人くるかわからない状態で始まった。アーティストも当初は高学年を想定していたが、低学年の参加が多く、子どもたちとどのように接していくか調整が必要だったのではないかとと思われる。

ただ、連続で5回行うことによって、最初は緊張していた子どもたちもだんだんとコミュニケーションが生まれていった。Aが中西さんのことを覚えていたり、文さんに抱きついている場面や、Bがいつも来ているアーティストの名前を言えるようになっていたことから、丁寧な信頼関係が構築されていったのだろう。最初は

時間がかかるかもしれないが、それでも時間をかけることで子どもたちのなかに学校や家族以外のつながりが生まれることはとても意義があると思う。

## 2. 英彰子ども食堂ここなら

### (1) 基本情報

日付	2022年10月23日（日）	会場	英彰ふれあいセンター
時間	10:00 事前ミーティング 10:15 受付開始 10:30-11:35 ワークショップ 12:00- 子どもたち食事 12:30- 食事&振り返り 14:00 振り返り	概要	子ども食堂「ここなら」での3回目の実践で小学2年生対象。身体をつかったワークで、アイスブレイクから野外散策、人に自分の表現を見せるところまでおこなう。
参加者	子ども	15人	男女比はほぼ同数
	食堂スタッフ	約5人	伊藤みどりさん 他
	財団スタッフ	3人	常盤さん、今野さん、石澤さん
	その他	0人	なし
進行役	神永真美さん（他アシスタント2人）		
記録者	馬淵悠美		

### (2) 会場、参加者、進行役等に関する補足情報

#### ◎ 会場について

堺市立英彰小学校横の元幼稚園が現在「英彰ふれあいセンター」として公民館的に利用されている。子ども食堂の他にもテコンドー教室やダンス教室などが開かれており、そういった他の講座にも通っている子どもも多い。元講堂のような開けた空間のある建物と炊事場やいくつかの会議スペースのようなものがある建物、遊具などのある庭からなる。

#### ◎ 英彰子ども食堂ここならについて

月に1~2回、子ども食堂を開いている。代表は伊藤みどりさん。PTAなどの役回りもやっていたことから地域からの信頼の厚い人で、常盤さんによると「英彰ふれあいセンターという場でやれていることもその現れ」とのこと。子ども食堂のスタッフは伊藤さんの求心力によって集まっているように見受けられる。

子ども食堂やワークショップ開催前には隣接する堺市立英彰小学校でチラシを全校配布している。伊藤さんは小学校の先生や保健室と連携をとり、難しい状況にある子どもについては情報交換をおこなっている。

#### ◎ 参加者について

この回は「ここなら」でのワークショップ第3回目で対象は2年生。1回目は3年生、2回目は4年生。「ここなら」の利用者はかなり多く、ハロウィンパーティーなどのイベントでは約200人参加するほど。便宜上人数をわけるために学年で区切ることに。

兄弟でくるケースもあるが、今回の参加者は全員英彰小学校の2年生で、すでにみんな知り合い。多少集団行動の難しい子もいるが、子どもたちがお互いの扱い方をわかっているようで、子どもたち自身ですでにうまくやっていた。大人のことを「先生」と呼ぶ子も数人おり、学校の延長線上に捉えている子も多い印象。

### ◎アーティストについて

神永真美さん(ドラマティーチャー/追手門学院高校表現科教諭)と、アシスタントとして大学生2人(ケンちゃん、アッキー)が担当。神永さんは身体表現を専門とし、追手門学院高校表現科で教えている。アシスタントの二人は神永さんの教え子で、彼女のやり方をよく理解しているし信頼関係もすでに築かれていた。アウトリーチ的な現場経験もあり、神永さんのとりこぼした子どもたちのカバーを担う。子どもの扱いがうまく、身体もよく動く。

### ◎備考

この日は取材が入った。

## (3)事前打ち合わせの記録

アーティスト、アシスタント、財団スタッフ、食堂実践者、記者、調査者(馬淵)が全員集合しミーティングにて全体の流れやワークショップの内容、注意事項の確認を行った。

- 3年生、4年生へのワークショップで馴れてきてやりたいこといっぱい出てきた。今回が内容的には一番難しい。今日は秋がテーマ。まずは身体ほぐしのアイスブレイクから。「14ひきのあきまつり」という秋の絵がたくさん描かれた絵本を見せ「秋の森ってみたいね」と誘導。絵本にならってネズミの視点で外に出てみる。帰ってきたら「どんなもの見つけた?」と聞いて集めてきたそれぞれの「秋」を見せ合う。その後落ち葉に見立てた色紙を摩擦と空気抵抗で身体にひっつけて踊る。それを子どもたちどうし鑑賞しあう。(神永さん)
- 大人が多いのでプレッシャーにならないように。(今野さん)
- ただ立って見ているのはお断りしていること、輪に入ってもらえるように。(常盤さん、記者と馬淵に向けて)
- 子どもが16人(うち1人欠席)おり、大人全員が入るのは広さが足りないため、中で立って見ているよりは窓から見学してはどうか。(伊藤さん)

## (4)ワークショップの記録

時刻	誰が	誰に/誰と	何を/どうした(所感があれば斜字体で記入)
10:15	神永さん	子どもたち	やってきた子どもたちへ積極的に声かけをし、全力で氷鬼ごっこを。ここですでにかなり盛り上がる。
10:30	伊藤さん	子どもたち	神永さんの紹介。「今日なにをするか知ってる?」「真美ちゃんといっしょに劇あそびをします」

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした（所感があれば斜字体で記入）
	神永さん、アシスタント	子どもたち	すこし挨拶（幕の向こうに機材を置いていたので）「幕の向こうには行かないで」（中をちゃんと見せる）そこからアイスブレイクのワークへ。全員で大きな円になる 〈進行〉 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 「真美ちゃんのマネしてみて」という誘導で声を出さずに様々なポーズをリズムよくやってみる</li> <li>• 自分の名前にポーズをつけて神永さんとアシスタントが自己紹介。それを子どもたちが真似する。</li> <li>• 隣の子の名前を呼びかけながら拍手してそれを一周まわす。反対周りも。</li> <li>• 列車あそび。列車に連なりながらいろんな質感の動きを経験する3人は子どもたちの中に入って基本いっしょにあそぶようなスタンスで関わっている。</li> </ul>
	食堂実践者		着替えて参加。はじめは外側で見ていたが伊藤さんの呼びかけで円に参加する。伊藤さん「子どもってこんなかわいかったんやって思うでしょ？」などと大人たちに向けて
	子どもたち		「なにこれー！」などという声上がりつつ、わからないながらに実践し、だんだんルールを理解していく。マスクは外していいと伊藤さんから声かけあり。この時点ですでにアシスタントの大学生にずいぶんなつき、なかなか離れない子も。
	今野さん、石澤さん		壁際で見守りに徹している。輪から外れる子のケアなど行う。
10:50	神永さん	子どもたち	絵本の読み聞かせ「14ひきのあきまつり」。そこから「ねずみさんの視点でこの周りを散歩して、みんなに紹介したいものを見つけよう」という誘導。子どもたち外へ。
	食堂実践者		スタッフはこの辺りでほとんど抜けてしまう。
	伊藤さん	アシスタント、子ども	アシスタント的に関わる。「靴揃えるように言ってー」など指示を促す。鉄棒をしたがった子に「〇〇ちゃんがまわったらみんなまわりたいと思うからあとでやろう、約束ね」。
	今野さん、石澤さん	子どもたち	強制しきらないところを輪に入れる場面も。過保護すぎない代わりについていけなかった子が取り残されることもあるのでそこをカバーしている。
11:00	神永さん	子どもたち	中へ呼び戻し、見つけてきたものを色紙の上に並べるように言う。
	子どもたち		お茶休憩とりつつ並べたものを眺める。
11:05	神永さん、アシスタント	子どもたち	子どもたちを集めて紙を配る。概要を説明する。 〈進行〉 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 紙を落ち葉にみたくて、ひとりで落ちていく様子を再現する</li> <li>• ねずみさんになって落とさないように落ち葉と踊る 手→足→おなか</li> <li>• 2人組になって、落ち葉をお散歩させる</li> <li>• みんなで落ち葉をおとさないように踊る（2チームに分かれて鑑賞しあう）</li> </ul>
	子どもたち		お気に入りの大人がいる子どもが数人おり、アシスタントの膝に座ったりベッタリな子もいる。何をしろという指示が自由度が高いので各自遊び方を見つけて勤しんでいる。
11:30	神永さん	子どもたち	また最初と同じように全員で大きな円になってコームダウン。今日はどうだったか、なにが印象に残ったかなど挙手制で聞いていく。
	子どもたち	神永さん	発言が得意そうな子が中心ではあるが競って手をあげて、しっかり今

時刻	誰が	誰に／誰と	何を／どうした（所感があれば斜字体で記入）
			日やったことの、何をどう感じたかを伝えている
	伊藤さん	子どもたち	神永さんからバトンタッチし、アンケートの説明とこのあとのご飯のアナウンスなど。
11:35	財団スタッフとアシスタント	子どもたち	付き添ってアンケート補助。
	手の空いている大人		ご飯のために机や椅子を準備。

## (5) 事後の振り返りの記録

### ◎ アーティスト

#### [神永さん]

- 16人は多い。もう一人アシスタントいてもよかった。見きれしていない！という瞬間があった。大人が多い回でよかった。
- 普段の自分たちとはちがう視点をもつ。言葉や殴り合いではないコミュニケーションでこういう関わり方もできると感じてほしい。あとはたくさん身体をつかって気持ちよくなる。庭に出て「みんなに見せたい秋のもの」を見つけようの段階で、一回は試してみる姿勢があってよかった。

#### [アシスタント・アッキー]

- はずれた子に寄ってあげる感じにしていた。
- かまってほしい子が「～できるんだ！」と集まったり、表現してそれを褒められる成功体験がつかれる現場だったと思う。承認してあげることの大切さを思った。

#### [アシスタント・ケンちゃん]

- 受付に出ていたのでワークショップ前の空気がわからず、こぼれた子のケアは主にアッキーに任せて中に入って遊ぶことを重視した。（大人としてではなく）子どものリーダーとして参加することでみんなの意欲を引き出せたと思う。
- はぐれている子も視線だけはしっかりこっちに向いていて、ただ疲れているだけというふうな子が多かった。プログラムが嫌なわけじゃなかったと思う。

### ◎ 子ども食堂 スタッフ

- 「この子ってこんな子やったんや」という驚きは少ない。学校とここならとワークショップで差は感じられない。その驚きは学年上がった方がある。
- 誰かが「お母さんと話してね」と言ってしまっていたと（子ども食堂）スタッフから指摘あった。すかさず他のスタッフがひとり親の子に「ばあばと話してね」とかフォローしてくれた。「おうちの人」をつかっていきたい。
- 今日の欠席は2人。1人は門まで来て誰もいなかったと帰ってしまった。もう1人は子どもの字での申し込みで来ないかもとは思っていた。

- ここならの申し込みは手書きの用紙で子どもが自分たちで示し合わせて申し込むことができる。

## ◎ 財団スタッフ

### [常盤さん]

- ナビゲーターやファシリテーターとは別のアシスタントは、文字通りのアシスタントだけではなく集団のなかに中心と周縁をつくることができる。子どもの気持ちのムラを許容できるためにもアシスタントが必要だと再確認した。
- (各ジャンルの) 芸術の技術がどの部分で活かされているか考える。子どもに伝わっていたかはわからないが、今回だと落ち葉に見立てた紙がワークショップ全体のストーリーとして機能していた。なにかをしようとする中身は自分の中にある。あの紙がなかったらあの動きはなかった。紙ひとつあることで動きや秋のイメージが生まれていた。既存の動きがあって「できましたね」ではない、相手のことを言葉でない方法で気づき、どう動くかを見つける体験になっていた。

### [今野さん]

- 参加しているか参加していないかの境界線が曖昧で、外れたり入ったりが自由。コンディションが整ったら入るなど、外れやすい子ども子どもが自分で調節していた。
- 「子どもたちは自分たちでフォローしあえている」は全員一致に近い見解だった。

## (6) 記録者（オブザーバー）による全体の所感

### ◎ コントロールしない、できない。危険だけを理由に止めない

身体表現がテーマの今回のワークショップでは運動量が多く、コントロールする形で進行するのは実質不可能だった。そのなかで言うことを聞かせたり、全体をまとめることに注力するのではない進行になっており、「健全な個人主義」という印象をもった。神永さんは全体を見つ、見きれない部分は他の大人に諦めて投げることができるように見受けられ、そこをアシスタントや財団スタッフ、伊藤さんがうまくカバーしている。

### ◎ アシスタントの重要性について

今回のワークショップの実施においてアシスタントの優秀さは際立っていた。常盤さんのふりかえりの言葉にもあるように「中心と周縁」ができることによって安心して身を置ける子どももいるように思えるし、アシスタントたちがそこを引き受け自身で考え行動していることが場の安心感につながっていた。

### ◎ 子どもたちどうしの関係と学校外コミュニティ

今回の子どもたちはおそらく学校でもうまくいっているだろうと確信できるほどお互いの個性を理解しあって、どの子とどう付き合えばいいか子どもたち自身がすでに知っているようだった。同時にほぼ学級と顔ぶれが変わらず学校外のコミュニティとしては機能していないのではないかと思う。クラスの垣根を越えた交流にはなっている。今回のケースでは子どもたち自身が学校でもうまくいっているようなので良いが、学校に居場所がないような子がいる場合、ワークショップの参加も難しいかもしれない。

### 3. いづはまスマイル食堂

#### (1) 基本情報

日付	2023年2月4日（土）	会場	いづはまスマイル食堂
時間	12:00 子どもと一緒に食事 13:00 ワークショップ開始 14:40 ワークショップ終了 15:00 交流タイム開始 15:30 交流タイム終了・片付 16:00 振り返り開始 17:30 振り返り終了	概要	ワークショップでは、これまで作詞・作曲・振付してきた「いづはまスマイル食堂のうた」とリズム&振付「おかず」をみんなで録音する。
参加者	子ども	24人	年少から6年生、男女比はほぼ同数
	食堂スタッフ	2人	古藤さんご夫妻
	財団スタッフ	3人	今野さん、石澤さん、常盤さん
	その他	2人	西本さん（撮影担当：堺市新進アーティストバンク登録美術家）、橋本さん（堺市社会福祉協議会本部）
進行役	ワークショップリーダー：古橋果林さん（ピアノ） アシスタント：西前菜々子さん（クラリネット）、藤原朱里さん（サクソフォン）、森千夏さん（ソプラノ）いずれも堺市新進アーティストバンク登録音楽家		
記録者	内山幸子		

#### (2) 会場、参加者、進行役等に関する補足情報

##### ◎ いづはまスマイル食堂について

天理教泉濱分教会の道場を全面的に開放して行っている。1階はご飯を食べたり遊んだり宿題をする場所。2階でワークショップを実施した。

子ども食堂の利用者は現在120名\*。お弁当を食べにくるのはいいけど、音楽、ワークショップというハードルがあるらしく、2割程度の参加者になった。ふだんは食堂で子育て教室もしていて、家庭が苦しい子がわかるので、食材を渡したりしている。

※堺市内で約80か所ある子ども食堂のうち、100名を超えるのは12～13か所くらい。社協と情報連携して、寄付などで運営している。有料の食堂も、無料の食堂もある。

##### ◎ 子ども食堂実践者より

いづはまスマイル食堂のうたを作ってほしいというリクエストをした。アーティストたちは食堂について聞

き取りをして、初回から歌作りを進めた。

### ◎ 参加者について

学年を限定しない。兄弟で参加する子どももおり、年少（3歳児程度）も数人いた。毎回参加する子、来たり来なかったりする子、初めて参加する子が混ざっていた。

### ◎ 進行役（ワークショップリーダー）古橋果林さん

音楽領域における、音楽家と聴衆のインクルージョンとなる新たな関係性を模索し、ワークショップをはじめとする聴衆の能動的体験の企画・演出・実演を行っている。従来の舞台と観客席とが分断した音楽体験にとどまらず、インタラクティブ性を取り入れながら、音楽と人間が有する創造的可能性を探求。芸術体験と市民社会とを繋ぐ企画を推進している。

### ◎ 進行役（アシスタント／堺市新進アーティストバンク登録者）

西前菜々子さん（クラリネット奏者）、藤原朱里さん（サクソフォン奏者）、森千夏さん（ソプラノ歌手）。

### ◎ 一日の流れ

連続ワークショップの途中から、アーティスト、スタッフが昼食を子どもたちと一緒に取るようになった。昼食を食べた後、アーティストたちと子どもがいっしょに名前を考えて名札を作る。終了後は「駄菓子屋さん」の時間があり、アーティストたちも参加。ワークショップの前後に子どもたちとの交流タイムがある。「駄菓子屋さん」は子どもたちが店員になっていて、ワークショップに参加しない子もゆるく関わられる時間になっている。アーティストが店員になってくれるときもあった。

## (3) 事前打ち合わせの記録

- 最終回で、録音するという明確なゴールがある。良い音楽を作ることよりも、音楽を楽しむこと。ことばではなく音や音楽でコミュニケーションすることを目標とする。（古橋さん）

## (4) ワークショップの記録

時間	誰が	誰に／誰と	何を／どうした（所感があれば斜字体で記入）
13:00	子どもたち	みんな	いつものように隊列を作って会場入り。会場では、古藤さんのはからいで、これまでの記録写真がスライドショーで流れていた。
	進行役	みんな	ウォームアップのための体操。リズムに合わせてからだのパーツを叩いていく。
13:05	進行役	みんな	「いづはますマイル食堂のうた」と振付をおさらい。
13:15	古橋さん	子どもたち	ランダムに3つのグループに分ける
	子どもたち	3グループに分かれて	「おかず」の創作。子ども食堂で好きなおかずを3つ決めて、振付した。
	古橋さん	アシスタント、財団スタッフなど大人たち	アーティスト、財団スタッフなど大人全員が各グループを離れるよう声をかける。（子ども食堂スタッフは不在）

時間	誰が	誰に／誰と	何を／どうした（所感があれば斜字体で記入）
	進行役	子どもたち	子どもたちに任せる放置タイム。
	古橋さん	子どもたち	子どもたちに任せつつ、何度も巡回して段階的なアドバイスを行う。
	アシスタント、財団スタッフ	子どもたち	アシスタント、財団スタッフがスーッと輪に戻ってくるが、まとめ役にはあえてならず、見守っている。
	藤原さん	子どもたち	藤原さんはワークに参加せず遊んでいる男の子たちを、座って見ている女の子たちと並んで座っている。見守り。遊んでいる男の子たちの中にも、年下の子をなんとかワークに参加させようとしているような子がいる。
	西前さん	Cさん	ずっとつまらなさそうな態度だったCさんが、畳を叩いてリズムを取り続けているので、子どもたちに提案するかたちで、リズムメーカーになってもらった。
13:30	古橋さん	子どもたち	「おかず」の中間お披露目を行いましょうと声かけ。
	子どもたち	みんなに	できている振付とリズムをみんなの前でお披露目。3チーム中2チームは完成していない。
13:35	古橋さん	子どもたち	グループワークを再開して「おかず」を完成させましょうと声かけ。
	子どもたち	3グループに分かれて	グループごとに「おかず」を完成させていく。
	今野さん	Bさんに	ずっと寝転がっていた（でも退室はしない）Bさんに、財団が持参していた記録用のコンパクトカメラを渡すと、カメラマンとして立ち回り出した。
	進行役	子どもたちに	引き続き古橋さんとアシスタントは見守りが中心だが、適宜リズムと振付のための助言を行った。
	古橋さん？西前さん？	Cさんに	リズムメーカーになっていたCさんにカホンを渡す。
13:45	子どもたち	みんな	完成した「おかず」のお披露目。一番に見せたいグループばかりだったので、じゃんけんで順番を決める。（勝ったグループが一番に発表した）
13:50	古橋さん	3グループ	「おかず」を全グループ同時にやってみようという提案。
13:55	古橋さん	子どもたち	録音する音楽の構成を子どもたちと決める。①いづはまスマイル食堂の歌 ②おかず ③アーティストたちの演奏 ④いづはまスマイル食堂のうた に決定。子どもたちからの提案はほぼなく、アーティストの提案どおりにやる。
14:00	古橋さん	子どもたち	通し稽古。練習しながら、「おかず」を各グループが連続でお披露目することや、「最後は全員で”イエーイ”と言う」など構成を古橋さんが促し、確定していく。
	進行役	子どもたち	録音に向けて練習。
14:07	古橋さん	チャイム隊の子たち	休憩中。録音でのハンドベル／トーンチャイムパートを担当する子どもたちと事前打ち合わせ。
	西前さん、藤原さん	子どもたち	休憩中。古橋さんとハンドベル隊の横で、ピアノやハンドベルを触ってる子とそれぞれセッションが始まる。
14:17	進行役、財団ス	子どもたち	ワークショップ再開。録音・撮影時の立ち位置、並びなどの確認。

時間	誰が	誰に／誰と	何を／どうした（所感があれば斜字体で記入）
	タッフ		
	古橋さん	Dさん	ピアノ横で古橋さんが奏でる予定にしていたウィンドチャイムからDさんが離れない。「ここにいるとカメラに映らないよ？」など諭すが、最終的に演奏方法を教えてウィンドチャイム担当になってもらった。
	進行役、財団スタッフ	Bさん	カメラに夢中になったBさんは引き続き撮影に入らない。アーティストもスタッフも特に強制しない。
14:20	古橋さん	子どもたち	リハーサル演奏。音楽の進行を確認する。
	今野さん	Cさん	「カホンの音が大きすぎる」という指摘。これを受けて、古橋さんがCさんに新しい奏法を伝授する。
	子どもたち		録音準備のため、少し待ち時間。
14:30	全員	全員	本番録音。
14:40	進行役	子どもたち	一人ずつコメントをして終了。「3/25の演奏会に来てね」と声かけをして終了。

## (5) 事後の振り返りの記録

### ◎ アーティスト

#### [古橋さん]

- ・ 良くも悪くも“慣れてきた”ことの対応として、あえて放っておくことにしたら、子どもの方からアイデアを出してくるようになった。
- ・ グループはランダムにしなくてもよかったかもしれない。やんちゃな子とおとなしい子を混ぜずに、似ている子たちで作ったら、どんなものができたのか見てみたかった。やれるとよかった。
- ・ 完全放置型即興音楽ワークショップ「音の砂場」をやっている鈴木潤さんは「そこに自由なコミュニケーションがあれば、カオスであればあるほど秩序が生まれてくる」と言う。そこでのアーティストの役割は、それらが引き出されるための設え（楽器の配置、空間の演出など）を作ること。

#### [藤原さん]

- ・ 「おかず」のグループワークでは、こどもたちが全くまとまらないので内心とても不安だった。表情に出ていたかもしれないと、反省でいっぱい。

#### [西前さん]

- ・ 音や音楽を通じたコミュニケーションができた。たとえば「最初の声が小さいとみんなの音が小さくなるよ、ビビったらだめだよ！」と音楽面でのアドバイスができた。

### ◎ 子ども食堂スタッフ

- ・ 今回のワークショップまでに、アーティストたちが作った「来てね！」と呼びかける動画の力がすごかった。来なくなった子どもたちがもう一度戻って来やすくなった。
- ・ 学校にいけない子も参加している。楽しいと思ってもらえているし、子どもたちがアーティストたちを信頼していく過程が伝わってきた。

- いろんな年齢の子、男女、さらに幼児まで混ざっていて大変だったと思う。よくこんなに一体にしてくれた。

## ◎ 財団スタッフ

### [常盤さん]

- “いろんな人たちがいるというのは当たり前のこと、社会とはそういうもの。今回は“いろんな人たち”のテンポが合っていたのがすごい、頼もしい。そしてそれを音楽で実現できたことに意味がある。
- 楽器をさわり続ける、アンサンブルに参加し続ける環境に身を置くことで、良い音を出そう、良いリズムを発明しよう、という音楽的なこだわりが見えはじめた。

### [今野さん]

- やんちゃな男の子たちと同じグループになって、女の子たちが黙ってしまうという場面があった。でもそういう中で何とかやっていかないといけないという、社会経験のひとつになったと思う。
- 前回のワークショップでもカメラを渡したら急にアクティブになった。今回もカメラを渡すか迷った。逃げるだけではいけない。

## (6) 記録者（オブザーバー）による全体の所感

### ◎ 安全・安心な場所

常盤さんからは、「子ども食堂には生活困窮家庭への支援だけでなく居場所支援の機能も着目されていて、本事業も居場所機能の強化という目標がある」と聞いていた。これを聞いて最初に考えたことは、アウトリーチワークショップが、子ども食堂に集まる理由を多様に開くことへの期待だ。すぐに想像するのは「みんなで演奏することが楽しいから」「楽器が触れるから」「つくることが楽しいから」などのモチベーションが生まれていくことである。

記録者は、そのようなモチベーションが生まれるためには、まずその場が安全・安心な場であることが前提であると考えている。具体的には、子どもたちが居やすい場への配慮、いろいろな子どもが集まる場での公平性への配慮である。このワークショップでは、その場にいる大人たちが、子どもたちに対して全方位的に配慮し、守ろうとしていることが感じられた。これについては、アーティストだけがワークショップをコントロールするのではなく、マネジメント側である財団スタッフが対等に現場で意見を言える関係であったことも関係していると考え。創作とマネジメントが双方の視点でフォローし合うことで、子どもたちにとってより安全・安心な場に行っていると感じた。

### ◎ 子どもたちに委ねる・手放す

第3回ワークショップ後の振り返りでは、子どもたちがワークショップに慣れるにしたがって自由な振る舞いが多くなり、ワークがしづらくなっているという悩みについて話し合われていた。今回のワークショップでは「積極的に子どもたちに委ねる」という手法をとった結果、子どもたちがグループごとに異なる秩序を作っていくのを垣間見ることができた。

子どもたちが自律的に動く状況が生まれたことで、進行役のアーティストたちは、子どもたちに”このタスクをこなしてね”というコミュニケーションではなく、音楽を通じたコミュニケーションに費やすための余白が生まれたようだった。前回よりも古橋さんが音楽的なアドバイスをしていく場面が明らかに増えていた。

古橋さんは振り返りで「(予定と違ったが)結果的に良かったのでそのままにした」「心配はあったが、本人たちが楽器を持ってスタンバイしてしまっていたので、委ねた」といったコメントが印象的だった。ワークショップとして枠組みは用意しつつ、ある程度のところでコントロールを手放すという判断を随所でしているのが伺えた。“全体を見渡せば、そこは重要でない/問題ではない”という判断が素早くなされている。

そのような手放す態度があった一方で、このワークショップは、大きな枠組みでいえば、進行役の指示に従って行動するプログラムだった。こども食堂はさまざまな興味・関心・特性の子が集まる場であるということをつまえて、個々の差異についてワークショップでどのように取り扱うか(どこまでどのように受け容れることができるか)、プログラムづくりの段階でスタッフとアーティストで確認しておけると、現場でのマネジメントに迷いが減るかもしれない。

### ◎5回のワークショップを通じて、子どもたちとの”テンポ”が合っていった

この5回の連続ワークショップは、毎回初参加の子が少数いたものの、基本的に同じこども参加者たちと作り上げてきたもので、連続ワークショップならではの親密さや盛り上がりがあった。

進行役のアーティストたちが委ねる・手放していくごとに、こどもたちとの一体感生まれていくように見えた。90分という短いワークショップでたくさんのメニューをこなしていたが、ワークに集中する時間と、休憩中にリラックスしながらめいめいにセッションしたり楽器をさわったりする時間、どちらも互いにテンポを合わせて進めていたと思う。

録音中のこどもたちの表情から、5回のワークショップを通じて積み上げてきたことの達成感や満足感が感じられた。古橋さんが目標としていた「音楽を通じたコミュニケーション」は、セッションするということだけではなく、音楽を中心にみんなで集まり、楽しみ、それを共有するという事を通じて実現されていたと思う。



## IV. アンケート調査

---

# 1. アンケート調査の概要

## (1) 調査対象

いづはまスマイル食堂、英彰こども食堂ここなら、にしのこまんぷく食堂の3カ所で実施する「まちなかアートプロジェクト」に参加した児童・子ども

## (2) 調査方法

調査票の直接配布、直接回収

## (3) 調査期間

令和4年6月4日～令和5年2月4日

## (4) 回収数

191件

## (5) 回答者の構成比

### ◎ワークショップの実施施設

いづはまスマイル食堂	99件 (51.8%)
にしのこまんぷく食堂	47件 (24.6%)
英彰こども食堂ここなら	45件 (23.6%)

### ◎年齢層

4歳以上6歳以下	18件 (9.4%)
7歳以上9歳以下	114件 (59.7%)
10歳以上12歳以下	54件 (28.3%)
無回答	5件 (2.6%)

## (6) 調査項目

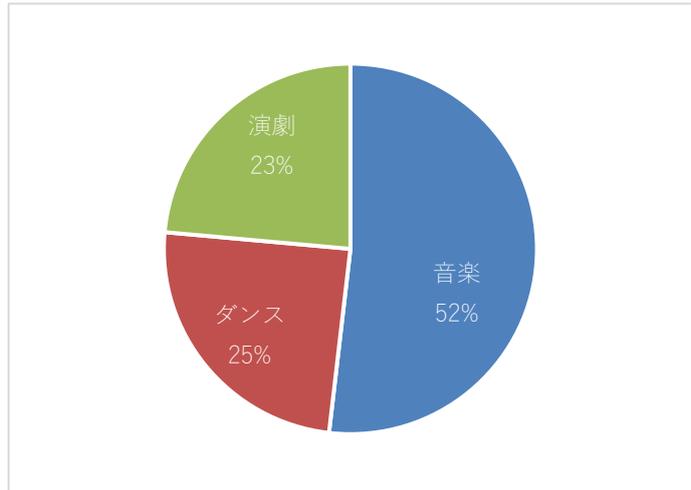
- 年齢（数値回答）
- 最近、楽しくいきいきと生活しているか
- 会場の子ども食堂への来訪頻度
- 子ども食堂の友だちや大人とのかかわり方
- 今日のワークショップに参加して感じたこと

- ワークショップ全体の満足度
- またワークショップをやりたいか

## 2. 調査結果

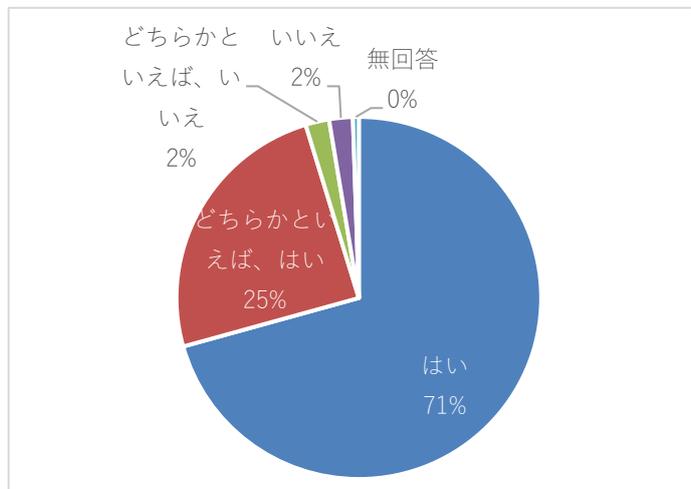
### (1) 回答者が参加したワークショップのジャンル

- 回答者が参加したワークショップのジャンルは、実施会場別の回答比率と同じで、音楽が52%、ダンスが25%、演劇が23%となっている。



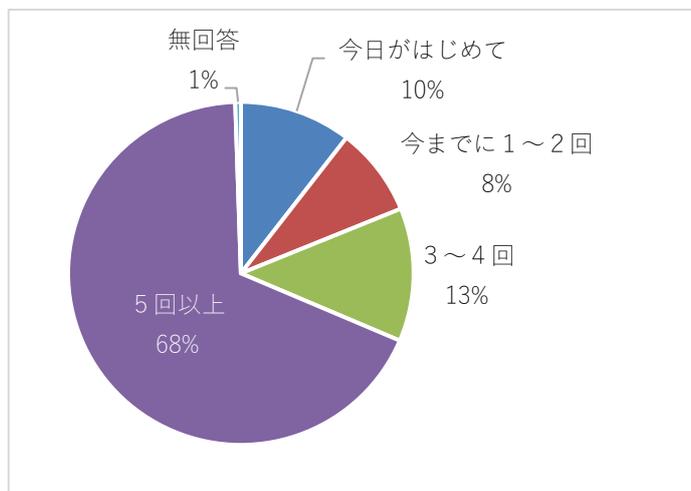
### (2) 最近、楽しくいきいきと生活しているか

- 「あなたは最近、楽しくいきいきと生活していると思いますか」と尋ねたところ、「はい」が71%、「どちらかといえば、はい」が25%、「どちらかといえば、いいえ」が2%、「いいえ」が2%となっている。



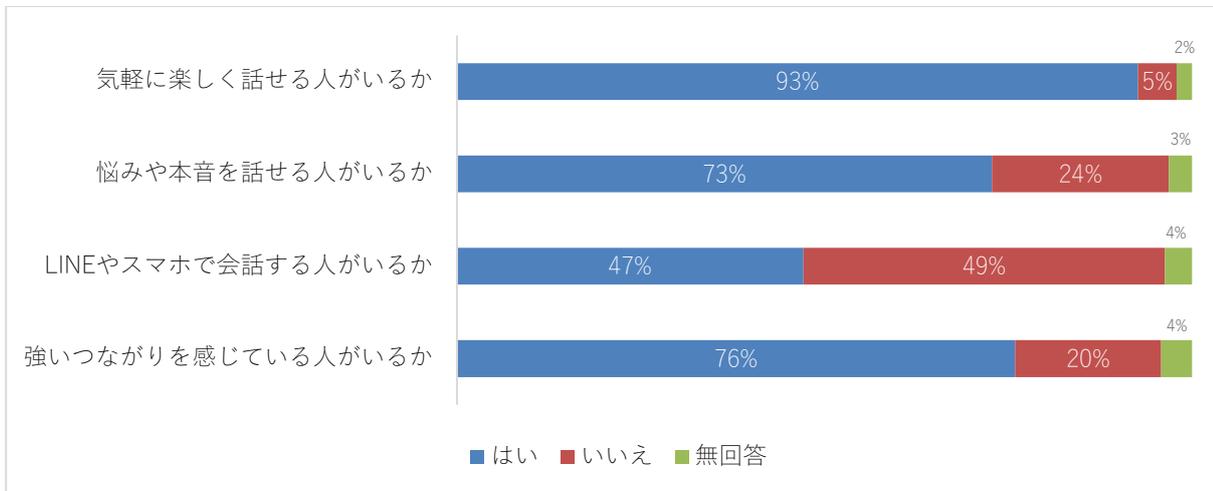
### (3) 会場の子ども食堂への来訪頻度

- 会場となっている子ども食堂に、今まで何回くらい来たかを尋ねたところ、「5回以上」が68%、「3~4回」が13%、「今日がはじめて」が10%、「3~4回」が13%、「今までに1~2回」が8%となっている。



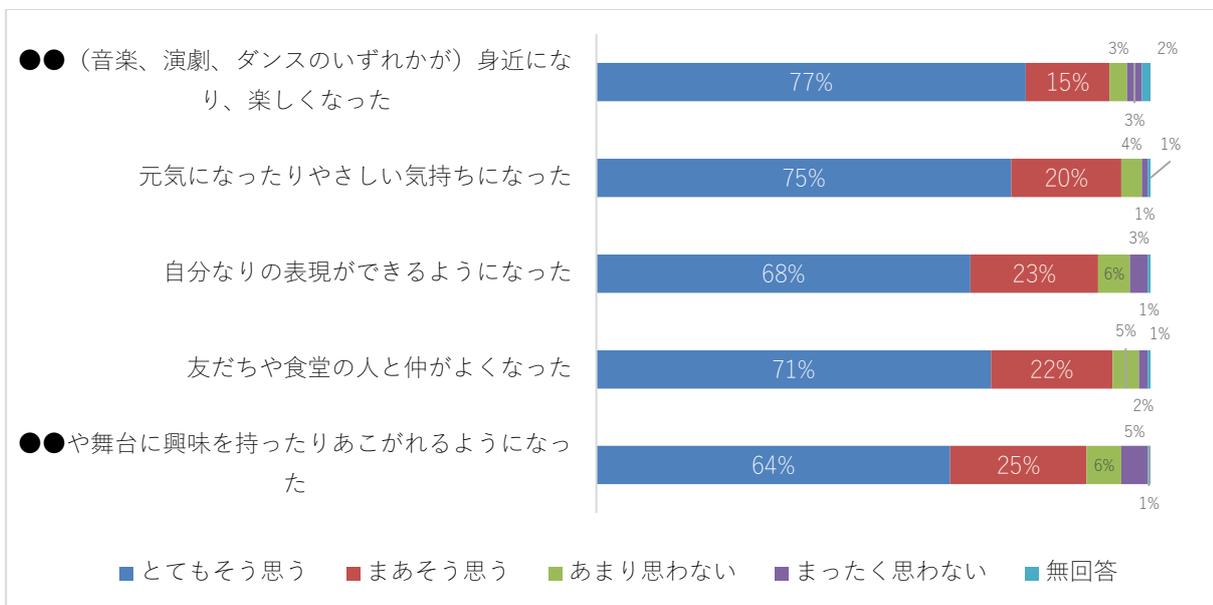
#### (4)子ども食堂の友だちや大人とのかかわり方

- 食堂で出会う友だちや大人と、回答者関わり方について、4項目を提示して「はい/いいえ」で尋ねたところ、「はい」の割合で、「気軽に楽しく話せる人がいる」が93%、「強いつながりを感じている人がいる」が76%、「悩みや本音を話せる人がいる」が73%となっている。「LINEやスマホで会話する人がいる」は「いいえ」が49%で「はい」を上回っている。



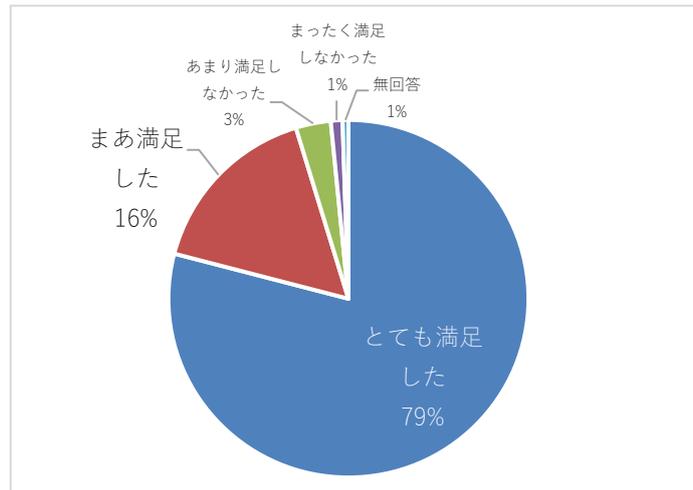
#### (5)ワークショップに参加した感想

- 「今日のワークショップに参加して、どんなことを感じましたか」として、5項目を提示して尋ねたところ、「とてもそう思う」の割合で、「●●（音楽、演劇、ダンスのいずれかが）身近になり、楽しくなった」が77%、「元気になったりやさしい気持ちになった」が75%、「友だちや食堂の人と仲がよかった」が71%、「自分なりの表現ができるようになった」が68%、「●●（音楽、演劇、ダンスのいずれか）や舞台に興味を持ったりあこがれるようになった」が64%となっている。



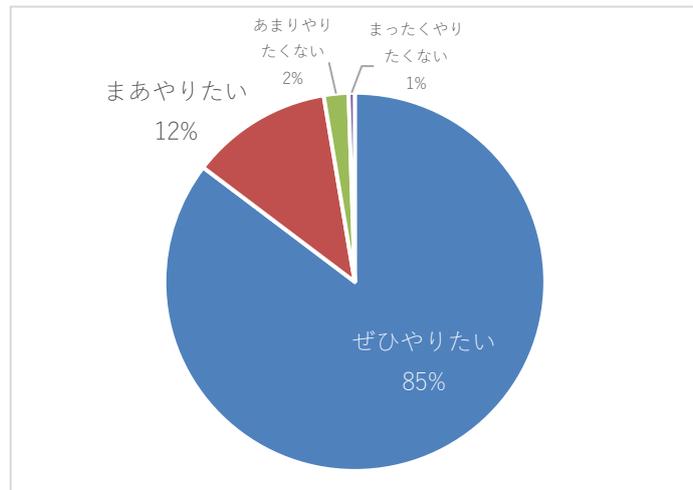
## (6) ワークショップ全体の満足度

- ワークショップ全体にどのくらい満足したかを尋ねたところ、「とても満足した」が79%、「まあ満足した」が16%、「あまり満足しなかった」が3%、「まったく満足しなかった」が1%となっている。



## (7) またワークショップをやりたいか

- 「またワークショップをやりたいですか」と尋ねたところ、「ぜひやりたい」が85%、「まあやりたい」が12%、「あまりやりたくない」が2%、「まったくやりたくない」が1%となっている。



### 3. 調査票

#### ◎ 児童用

#### まちなかアートプロジェクト@いづはますマイル食堂 ワークショップ参加者へのアンケート調査

ワークショップに参加してくれたみなさんからの意見を、これからのワークショップにいかしていきますので、アンケートに協力してください。教えてくれたことは目的以外には使いませんので、安心して答えてください。

【Q1】お名前(またはニックネーム)と、年齢をお答えください。

※以前も同じアンケートに答えたことがある人でニックネームを使った人は、同じニックネームを書いてください。

お名前(またはニックネーム) \_\_\_\_\_ 年齢 \_\_\_\_\_ 歳

【Q2】あなたは最近、楽しくいきいきと生活していると思いますか。(☑はひとつだけ)

はい  どちらかといえば、はい  どちらかといえば、いいえ  いいえ

【Q3】あなたは今までにいづはますマイル食堂に何回くらい来ましたか。(☑はひとつだけ)

今日がはじめて  今までに1~2回  3~4回  5回以上

【Q4】いづはますマイル食堂で出会う友だちや大人と、あなたのかかわり方を教えてください。

(☑は横にそれぞれひとつずつ)	はい	いいえ
気軽に楽しく話せる人がいますか	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
悩みや本音を話せる人がいますか	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
LINEやスマホで会話する人がいますか	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
強いつながりを感じている人がいますか	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

【Q5】今日のワークショップに参加して、どんなことを感じましたか。

(☑は横にそれぞれひとつずつ)	とても そう思う	まあ そう思う	あまり 思わない	まったく 思わない
音楽が身近になり、楽しくなった	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
音楽をすることで元気になったりやさしい気持ちになった	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
音楽をすることで自分なりの表現ができるようになった	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
音楽をすることで友だちや食堂の人と仲がよくなった	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
音楽や舞台に興味を持ったりあこがれるようになった	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

【Q6】では、このワークショップ全体に、あなたはどのくらい満足しましたか。(☑はひとつだけ)

とても満足した  まあ満足した  あまり満足しなかった  まったく満足しなかった

【Q7】またワークショップをやりたいですか。(☑はひとつだけ)

ぜひやりたい  まあやりたい  あまりやりたくない  まったくやりたくない

ご協力、ありがとうございました。





## V.ヒアリング調査

---

# 1. アーティストへのヒアリング

## (1)実施概要

実施日：2023年2月23日（木）10:00～12:00

会場：フェニーチェ堺 小スタジオC

参加者：古橋果林さん（音楽ワークショップ・リーダー）、神永真美さん（追手門学院高等学校 表現・コミュニケーションコース 教員）、三ヶ尻敬悟さん（contact Gonzo）

聞き手：大澤寅雄（NPO法人アートNPOリンク）

## (2)意見要旨

### ◎ ワークショップで印象に残ったエピソード

- 「今日は全然面白くなかった」とか「もう来ない」と言うけれども、ほぼ全ての回に来てくれた子がいた。あと、毎回新たに取り組むことに対して新鮮に驚いてくれる子がいた。
- 食堂実践者が「こんなに甘えたい子たちだったとは思いませんでした」と言うほど、大人に甘えてくれた。子どもにとって、素直な自分でいてもいい場所になっていたとしたらうれしい。
- 子どもたちの中には、みんなで取り組むタイミングで、その輪から逸れて別のことをやる子もいたけれども、それもみんなで受け入れている雰囲気がいいと思った。
- ワークショップの回を重ねると、良くも悪くも緊張感が薄れていく。その中で「ここは大事な場面だから」と伝えると、とても真剣な表情で、求めた役割に応えてくれることがあった。
- ワークショップでは、なるべく子どもの自主性や自発性を尊重したい。レッスンすることや正解を求めることは、ワークショップでやることとは少し違うのではないか。

### ◎ 子どもや大人の関係性の変化、ご自身の変化

- 初回のワークショップを迎えるまでは、食堂実践者にとって「ワークショップ」が想像できないため、何をやるのか懐疑的だった様子。ワークショップを経験すると、その意義を理解してアーティストも信頼を獲得できたと実感できた。
- 音楽創作ワークショップの最後では、見学してくれた人が様子を見て「子どもたちみんながバンドメンバーみたいな感じだった」と言ってくれた。アーティストと子どもがフラットな関係で「次はあいつらと何をしようかな」というような気持ちになれた。
- ワークショップを実施した場所のひとつが小学校だったこともあって、子どもたちを取り巻く様々な立場大人たち（食堂実践者、近隣の小学校の校長先生や卒業生など）との濃密な関係性の中に、アーティストとして関わることができた。
- 初めてワークショップを協同するアーティスト同士の関係についても、経験を重ねることで信頼関係を構築することができた。

- ワークショップの「型」とも言えるスタイルで従来やってきたアーティストにとって、今回のワークショップでは、自分の「型」に縛られずに自由にやってもいいということ、子どもと関わる中で気づきがあった。
- ワークショップで、子どもたちの自主性を引き出すような構造をどのように提供できるかを考えれば、もっと遊んでくれるのではないかと、自分自身の考え方が変わった。
- これまでのワークショップが大人を対象にしてきたため、同じメソッドでは子どもには難解だったためどう子どもに楽しんでもらえるかということに注力した。

#### ◎ 今年度の成果と今後チャレンジしたいこと

- 食堂実践者から、ワークショップをするにあたって、子どもたちが経験したことのないことを、経験させてあげられる場にしたいと言われた。その点では、普段の生活や学校ではできないことができていたのではないか。
- 子どもたち全員が音楽を好きにならなくてもいいけれども、「音楽って楽しい」と思える瞬間が生まれるようにしたかった。その点で、全力で音楽を楽しんでくれている姿が見られたのは成果であり、子どもたちの変化でもある。
- 子どもたちが、経験していないことにトライすることに拒否反応を示すことが多いと聞いたので、一緒に楽しみながら挑戦することはできたと思う。あと、人と関わるのが好きだと思ってもらえていたらいいと思う。子どもたちはワークショップでたくさんの大人と関わって、新しい関係を持ち込めた。それが成果だと思う。
- 自宅でも、学校でも、公園でもない「食堂」という場所を、遊び場として開くことができたのは、子どもにとって面白い経験をしてもらったのではないか。食堂実践者からも、食堂という場を、食堂以外の使い方で開く可能性を見出してもらえた。
- チャレンジしてみたいと思うのは、ワークショップのファシリテーションで、計画的になり過ぎないように自由度を上げていく方法を考えていきたい。
- 課題としては、子どもたちにとって学校での関係（例えばいじめる / いじめられるというような関係）を持ち込ませないようなルールを設定することが必要かもしれない。学校とは別の場所であるからこそ普段と違う場やルールがあってもいい。
- 写真や映像など、何か目に見える形でワークショップの成果を残すことができるといい。
- 反省点としては、子どもの目線でワークショップを考えること。

#### ◎ 子ども食堂でのワークショップの意義

- 子ども食堂という場所に対して、子どもの貧困問題や家庭環境の問題といった先入観はなかった。
- ワークショップの実施日ではないときに子ども食堂を訪れた際に、お弁当を配布する状況を見て、ただ弁当を受け取るためだけに、子どもや大人が来ては去っていく様子を見たときに、寂しく感じた。
- 子どもたちにとって、ワークショップで出会うアーティストは「多様な生き方がある」ということを知る大事な機会だと思う。

## 2. 食堂実践者へのヒアリング

### (1) 実施概要

実施日：2023年2月23日（木）19:00～21:00

会場：フェニーチェ堺 文化交流室A

参加者：古藤一彦さん（いづはまスマイル食堂）、谷岡裕喜さん（にしのコまんぶく食堂）、伊藤みどりさん（英彰こども食堂ここなら）

聞き手：大澤寅雄（NPO法人アートNPOリンク）

### (2) 意見要旨

#### ◎ ワークショップで印象に残ったエピソード

- ワークショップの初回の動員は苦しかったのだが、アーティストが子どもの心を掴んでくれて、まるで魔法使いみたいだと思った。優しく関わってくれたり、寄り添ってくれたり、励ましてくれたり、アーティストがその場を作ってくれた。
- ほぼ学校に行けていない高学年の男の子が、このワークショップには来てくれて、すごく楽しそうにしていた。彼にとってアーティストは、友だちのようであり、憧れのような存在だと感じた。こういう関係性の大人と関われるのが素晴らしいと思った。
- 体を使ったワークショップと言われて、最初、子どもたちが恥ずかしがって活動が成立しないのではないかと思ったが、「こんなに盛り上がるんだ」というくらい、いい意味の驚きだった。
- ワークショップの中で、グループで話し合う機会を作ってもらったところ、引っ込み思案だと思っていた子どもや、普段は控えめな子どもが、グループを引っ張っていきたり、はっきり意見を言えたりしている様子が見えた。
- 20代後半のアーティストや大学生のアシスタントという、とても若い世代が子どもたちに関わってくれ、食堂実践者のシニアの世代に見せる表情とは違う。「憧れのお姉ちゃん、お兄ちゃん」のような感じで、とても心を開いていて、いい意味で甘えられている様子が表れていた。
- 参加したのは小学1年生から3年生までの子どもが多かった。高学年は「恥ずかしい」と言って参加しなかったが、様子を外で見たり、終わる頃に参加する子どももいたりした。
- アーティストとの距離感が近いのは地域の特性もあるのかもしれないが、アーティストが子どもたちの中に入っていき力がすごいと感じた。子どもたちが普段は経験できないようなことに興味を持ったのは痛感した。
- 子どもたちが、新しいこと、初めてのことをやろうとすると喜ぶ子どもが7～8割いるが、2割くらいの子供からは、想像の及ばないことをやろうとすると「本当にできるのか、失敗したらどうなるの」という言葉が聞かれる。
- 失敗したらどうしようとか、知らないことに対しては、何をやるんだろうという不安感はあるだろう。得意なことは積極的になれるけれども、苦手なことは手が出ないのは、当たり前なことでもある。

## ◎ 子どもや大人の関係性の変化、ご自身の変化

- かつて子ども食堂に来ていて今は高校に通っている子が、ワークショップを手伝いに来てくれていた。ワークショップの振り返りが終わってから、その高校生が「ここにいる大人は信用できる」と言って、学校や家庭でも言えないことを言ってくれた。今回のワークショップはそういうきっかけにもなった。
- ワークショップの中でとても楽しんでいる子どもたちの様子を見ることができた。それは、同じアーティストが連続で来てくれていたのだから、子どもも安心したからだと思う。ワークショップの3回目くらいからは壁を作ることなく関わっていた。毎月同じ人が連続して来てくれるのが大きかった。
- コロナの影響で、子ども食堂としても普段はお弁当を渡すだけになっていたのが、コロナ以降に来てくれるようになった子どもたちは、一緒にご飯を食べていなかった。ワークショップでアーティストと関わっている様子を見ることで「この子はこういう表情や振る舞いをするのか」という発見ができた。
- ワークショップのあとで子どもたちとご飯を食べているときに、「今日な、お母さんが混乱してな、リモコンを投げつけられた」、「この間、お父さんにこんなことを言われて嫌やった」、「親に『死ね』って言われて嫌やった」とか、そういう話が子どもから出てきた。体が解放されると心が解放されるということはすごくあると思う。
- 子ども食堂の近くにある学校で、体育館も使わせていただいた学校の先生が、校長や教頭も含めて見に来てくれた。
- ワークショップでは、アーティスト、食堂のスタッフ、財団のスタッフ、社会福祉協議会の見学の人も、様々な立場の大人がいてくれて、誰も壁を作らずに一緒になってくれるのが、子どもにとっても、アーティストにとっても良かったと思う。
- コロナ禍以前は子ども食堂に来てくれていたある女の子が、コロナ禍になって弁当を配るだけになってから来なくなっていた。このワークショップで、またみんなと一緒に食べられることになったら、その女の子は大勢の友だちを誘って来るようになった。その女の子は引きこもりがちだったが、このワークショップでは、素直な自分を出せているのか、友だちも呼ぶことができた。彼女にとってワークショップが何かスイッチを押してくれているのかなと思った。

## ◎ 今年度の成果と今後チャレンジしたいこと

- ご飯を食べることとワークショップの時間帯、曜日、組合せ方をどういう形にするのか、運営面での難しさは感じた。
- 成果としては、アーティストが子ども食堂の「場の力」に感心してくれたことで、子どもたちが普段行き慣れていて、学校ではなく、大人がそこにいるという、場所の有効性に自分たち自身が気付けた。
- ワークショップの対象を学年ごとに1回ずつという設定は改善したい。あと、自分たちが子どものワークショップの内容で「これは無理だろう」「これはやめておこう」と思い込んではいけなかった。
- 子どもたちが才能に溢れていることに、スタッフが気づかされた。スタッフが子どもたちに「与える」ばかりではなく、子どもたちから私たちにも「与えてもらう」こともあっていい。
- 今回のワークショップは、自分の想像をはるかに超えた、自分たちでは思いもつかない内容を、プロのアーティストの持っている力で実現できた。同時に、その内容や費用について、自分たちのアイデアや財源では考えられないということも、圧倒的に感じた。

- 自分たちには本業があって、使える時間を使って子ども食堂をやっている。時間や体力の使いどころがどの子ども食堂にとっても課題だ。

### ◎ 子ども食堂でのワークショップの意義

——（進行役からの質問）困難な状況を抱える子どもに対して「文化や芸術を与える場合ではなく、より教育面や福祉面を充実させるべきだ」という意見に対して、どう思うか。

- 今回のワークショップをやる前に、少しそのことも考えたが、取り組んでみて「それは、ない」（文化や芸術をやっている場合ではないという考え方は違う）と確信した。子ども食堂は、単にご飯を提供するだけではない。
- ご飯を食べられないのも貧困だが、心の貧困、経験の貧困、人それぞれの貧困を抱えている。何ををもって貧困というのか。「文化や芸術を与える場合ではない」という人たちには、何ををもって貧困と考えるのかを伝えたい。
- 食の貧困はもちろんだが、関係性の貧困、例えば、子どもと大人との関わり方がわからないということもある。だからこそ、地域の様々な団体や施設の人たちにボランティアに来てもらうことを大事にしている。
- もちろん食事も大事だから、食を提供する。それと合わせて、アーティストたちを通じて、子どもたちが今まで経験できなかったことができ、家で子どもが話せば家族の話題になったり、家の中で言うのが難しくても自分の周りの人に話したりする。そういうことに繋がることは凄いことではないか。
- 「文化や芸術を与える場合ではない」という人たちがいれば、今回のワークショップで作った映像を見せたいと思う。そのくらい今回の内容はすごく良かったと思うし、これからも大事にしたい。

**令和4年度「まちなかアートプロジェクト」**

**事業検証調査 報告書**

令和5年3月

NPO法人アートNPOリンク